奈良のむかしばなし

第二十九話

文・山崎しげ子

黒淵の乙姫淵

乙姫淵

バス専用道の衣笠トンネル出口（黒淵側）の橋の下にある。
昔の面影がないのが残念。

奈良県の中央西、五條市の西吉野町。緑の山並みがどこまでも続き、鳥のさえずりも清々しい静かな山里だ。村を南北に流れる丹生川は、今は二メートルほどの川幅ながら、蛇行しているため、川に沿って昔は「淵は四十八淵」といわれたくらい淵が多かった。

その一つ、黒淵。流れの底が深く、水量豊かで淵が黒々としていたことからこの地名がついたという。かつてはここに大蛇が棲み、弘法大師の力を借りて退治したとの伝えも残る。その黒淵にある乙姫淵のお話。

※

昔、大日川という所に住んでいた音右衛門が、どうした弾みか、鉈を淵に落としてしまった。拾おうとすぐに飛び込んだが、それっきりとうとう浮かんでこなかった。

家ではもはや死んだものと諦めていた。が、一年がたった一周忌の日、ひょっこりと無事に帰ってきた。そして彼が話したことは「浦島太郎」の物語とよく似ていた。

淵の底には竜宮があり、落とした鉈は床の間に飾ってあった。そして、彼が竜宮を去る時、乙姫は、「旱の時はこの淵をかき干すとよい」と教えてくれた。

それ以来、雨乞いの時は、淵をかき干してからつぼにすると、大雨になったといい伝えられている。現に、明治のころにも淵をかき干したところ、三日目に大雨が降ったという。

※

黒淵のその乙姫淵。実は、昭和三十四年に完成した道路建設の影響で土砂が堆積し、淵が浅くなって景観は大きく変わった。地元の古老の話では、「かつては擂鉢状の深くて大きな淵だった。子供の頃は泳いではいけないといわれていた」そうだ。

とはいえ、古老が細い道を通って案内してくれた今も残る乙姫淵は、緑がかった青色の水面が五月の陽光にきらきらと輝き、その底に不思議な世界を秘めているような美しさであった。旱魃に悩まされた当時の人々が、そこに竜宮や乙姫の話をふと夢見たのも、なるほどとうなずける。

堀家住宅 賀名生皇居跡（西吉野町和田）

南北朝時代、京の都を追われて吉野へ向かう後醍醐（ごだいご）天皇を手厚くもてなした邸宅は、その後、後村上（ごむらかみ）、長慶（ちょうけい）、後亀山（ごかめやま）天皇の皇居に。ひっそりとした佇まいは、南朝の哀しい歴史を刻んでいる。
（見学は、事前の申込が必要。0747-32-0730 堀家まで）

物語の場所を訪れよう

「黒淵の乙姫淵」へは…

［車の場合］ 国道24号線五條市本陣交差点より国道168号線で十津川方面へ

［バスの場合］ 奈良交通五條バスセンターより黒淵バス停下車 徒歩約10分（便数が少ないのでご注意ください）

問 五條市西吉野支所 地域振興課 ☎0747-33-0301